

異族の接触思想とコミュニンの内在的問題たち

水溜真由美『『サークル村』と森崎和江—交流と連帯のヴィジョン—』

申 知瑛

目次

1. 『サークル村』and 森崎和江、その「and」の間隙
2. 『サークル村』と森崎和江の現在性
3. コミュニンの内在的問題
4. 異族との接触思想と「アジアの女たち」
5. 『第三の性』と、反撃を含む「and」

1. 『サークル村』and 森崎和江、その「and」の間隙

この本は出会いによって作られ、また新たな出会いへと繋がっていく本である。だが、それは人々の間での出会いばかりを意味するのではない。人々があらゆる生物との出会いによって集団を形成する時に繰り返し生まれる接触の嬉しさと辛さを、肌の感覚から問う力、そうした力の感じられる本である。ある意味で、本書は「出会い」との出会いを触発しているともいえる。

本を開くと、1950年代におけるサークル活動の膨大な内容を資料調査・インタビュー・現地調査により収集し整理した著者の努力に、尊敬を覚える。序論の「本書の背景」には、2001年に発刊された『幻影のコンミュニ—「サークル村」を検証する』（松原新一、創言社）以後、筑豊・川筋読書会や文化工作研究会といった研究会の結成、研究者たちの連携、東京との連携、聞き取りやインタビューの実施、雑誌復刊、関連する思想家への再評価、研究単行本の刊行と雑誌での特集といった、1950年代サークル活動をめぐる近年の一連の過程が一目瞭然に書かれている。「おわりに」には著者が今まで出会った人々の固有名が並ぶ。普通、固有名の記述がそれ自体で感動的になることはめったにないが、本書におけるそれらの淡々とした記述には人々の繋がりと愛情が垣間見えた。著者

は語る。「アクティブな社会運動家として生き方にも学ばせていただいた」（398）¹。400頁中60頁に迫る注、そこに書かれている出会いの痕跡にも著者の努力が確認される。本書についてのどんな感想も、本書に至るまでに著者が重ねてきた出会いに比べれば、色褪せたものなのではないか。豊かな出会いの中での研究を可能にさせたのは、「交流と連帯のヴィジョン」という副題が示す著者の意思と共に、対象であるサークル活動、『サークル村』、そして森崎和江の力でもあるだろう。1950年代から多様な出会いの中でコミュニンの模索が行われたこと、今でもその力は何時でも広がりうる潜在性としてあるということが、本書の価値を未来においても担保する。一度でも集団に身を投じた人は、その集団が維持されているかどうかとは別に、連帯と交流の快楽を停止させるわけにはいかない。

本書は炭鉱のサークル運動、『サークル村』、森崎和江の三つの部に分けられている。しかし、著者が明かしているように、執筆の順番は掲載順とは逆である。テーマを見ると、1950年代サークル活動の全体から、その中の『サークル村』という一つのサークル活動、さらにその中の森崎和江という個人へと続き、一見するとテーマが狭まっていくように感じられる。しかしそれは表面的な印象に過ぎない。これらの三つの部分を通過するうちに、本書の思想的な含意は、労働組合とサークルの関連性から、組合に属さない非正規労働者及び失業者なども含めた炭鉱における重層の関係へ、さらに労働・植民地・女性を繋ぐ問題へと広がっ

¹ 引用文とともに挿入する「（数字）」の表記は、『『サークル村』と森崎和江』からの引用頁番号を指す。

ていく。したがって、第1部を読みながら感じられた疑問は第2部で解消され、第1・2部で感じられた疑問は第3部で解消される。著者は辛抱強くそれらの疑問を潜めたまま、ドライな文体でサークル活動の背景を語っていくので、本書は入門書としての充実性も持っている。そして、まるで本書表紙に描かれた扇子のように、広く開かれた面から始まって、骨が重なる要の部分に森崎和江がいる。もしかすると、一つの集団が個人的でもありえるし、また同時に一人の個人がどんな集団よりも豊かな集団だということもありえる。したがって、著者は森崎和江、あるいは谷川雁や上野英信という固有名を使い、活動の成否に三人の役割が決定的であったことを述べているが、それと同時にそれらの固有名はざわめく無名集団との関係性の中で意味を持つことが出来た固有名、個人性を拒否する固有名であったことを意識して書いている。

ところで、なぜ著者は固有名そのものを使わない方法を取らなかったのかと、少し惜しまれるような思いを持って、本に問いかけるように読んでみた。この本は端正だ。タイトルにも文体にも無駄な言葉や余計な修飾がない。だからといってただ無味乾燥としたものでもない。淡々とした中に愛情があり、各章の終点には心構えを新たにした学者の判断が書かれている。率直に言って私は、1950年代のサークル活動、その中でもサークル村と関わった思想家たちの文章は、落ち着いて読むことができない。生々しい話が心にまっすぐ突き刺さってきて様々な集団の記憶を思い出させる。特定のエピソードが時空間を越えて広がる。エネルギーで満ちた思想家たちの文章や活動を前にして、私は、つい過剰になったり、つい一体化したり、溢れた感情に負けてしまい、何か別の書き方や繋がり方が必要であろうと省みたことがある。しかし、著者は数多くの出会いを経て新たになった実証主義と均衡を保った判断を持って、この感

情の興奮を静かに突破する。そこには、学者としてのある種の正当性のようなものが感じられる。固有名を使う理由もここにあると思われる。いくら固有名の使用を避けたところで、実在していたその者たちの役割を明確に論じることなくしては、無名の存在も語れない。著者が、森崎、石牟礼、上野は直接的にはサークルを作ることは出来なかったが、この人たちが共有していた「工作者の精神」は、「聞き書きやルポルタージュを通じて、谷川が強調した民衆の「沈黙」に接近する回路を作り出すことに成功した」(147)と語っているように。さらに、これら三つの固有名が象徴する運動は、それぞれの異なる力の背景（無名集団）を持って互いにぶつかり合ったことが描き出される。このような視点の取り方が、本書を戦後状況の一面を論じる書としても、ある戦後労働運動史の書としても、また三人の思想家についての入門書としても読ましめるという、読者の幅を広げる長点になっている。

著者はオルタナティブな労働運動の模索のために研究を始めたと述べているが、著者が初めて書いた論文は労働組合論ではなく森崎和江論であった。なぜだろうか。次の言葉にそのヒントがあると感じられた。著者は『『サークル村』や大正闘争のなかで、労働市場の二重構造の問題がどのような形で取上げられ労働運動のオルタナティブなヴィジョンがどのように提起」(11)されたのかを知るために、「森崎の独自の視点」(12)を見たかったのだと記している。この言葉は本書のタイトルが『『サークル村』と森崎和江』であることにあらためて目を向けさせる。『闘いとエロス』(1970年)という半ノンフィクションの著作を想起させもするこのタイトルは、「and」で繋がるが出来ないものを織り合わせている。サークル村と森崎和江はandで繋がるには釣り合いが取れていない。一方は集団で、もう一方は個人である。一般的には個人は集団に含まれている存在である。内容か

ら見てもサークル活動と労働者の関係性全般に焦点を当てた第1・2部と違って、労働・性・植民地をめぐる問題が複雑に織り込まれた第3部は異質である。だが、この異質なものの間の and—接合／接触が、森崎和江への注目によって再解釈されていく炭鉱サークル及びサークル村の豊かさの根源であり、この本に潜む複数的な読解可能性の源でもある。サークル村と森崎和江、闘いとエロス、男と女、正規職労働者と非正規・貧困労働者、日本人と朝鮮人といった並列表現で本書が示すのは、絶え間なく連鎖していく間隙と、その間隙を含んだままの接触である。このような意味で、「文化運動を立体的にみせる」（『週刊読書人』2013年6月21日号）との茶園梨加さんによる本書への書評は適切であった。こうした多角的な接近が、コミュニケーションをめぐる豊かな論点を提出している。第1部ではサークル活動での仲間意識とネットワークの問題が、第2部では炭鉱合理化が進む中でオルタナティブな労働者の関係を作った『サークル村』の特異性と、中小炭鉱労働者の立場から発言した上野英信の「横的連帯」の模索が、第3部では労働・性・植民地の関係性に注目しながらコミュニケーションの内部に再生産される問題が扱われている。

ところで、著者には本書の発刊にあたって二つの悩みがあったようだ。一つは、サークル村関連の研究書がこのところ続出している中で「さらにもう一冊の本を出版する意味があるのか」（395）。もう一つは、「なぜいまサークル運動なのか（395）」。1950年代に比べ現在の日本の労働運動が衰退したのは事実で、「懐古的な研究」（396）に留まってしまう危険性もあった。この迷いに著者は自ら次のように答える。「資本主義システムが存続する限り、団結することは労働者が競争や搾取から身を守る重要な手段で〔中略〕ネオリベラルな価値観が圧倒的に優勢となっている今日、いっそう切実な課題である。〔中略〕21世紀を生きる私たちにとって労働者を繋ぐ回路がどのようなものであり

うるか考えるためにも、1950年代の運動から学ぶものがあると信じている」（396）。したがって、この本は一義的には1950年代サークル運動についての研究書だが、含意はそれだけではない。労働と生が複雑に絡み合うコミュニケーションの内部的な問題について思索を巡らせている。私が実のところ本書を日本戦後思想史や労働運動の系譜という枠ではなく、アジアにおける異族との接触と、そこから生まれたコミュニケーションと、コミュニケーションで試みられた表現を巡る現在的な問いを抱えた本として、とりわけ2011年の震災以後の状況を意識しながら読みたい理由はここにある。

2. 『サークル村』と森崎和江の現在性

地震・津波・原発事故のあと、炭鉱労働やサークル村に関連する事柄は新たに視線を集めるようになった。炭鉱から石油へ、さらに原子力へと移り変わっていったエネルギー産業の変化、重層的な搾取関係に置かれ転々とする使い捨て労働者、原発労働者の放射線被害、東京と「東北」の位階的關係、災難の中で女性・子ども・障害者・老人が置かれた状況などとして露出した諸問題は、近代・植民地・資本主義の根幹と通底するものであり、その点で現在と50年代サークル運動は時空間が連続しているからである。炭鉱でのサークル運動は近代エネルギー産業の矛盾から生まれたものであるとともに、その解決法も伴っていた。50年代サークル運動と現在の問題を繋げて投げかける問いにおいては、特に「労働」と「村（集団）」についての再認識が問われることとなる²。

第一に、労組に入れない労働者はいかに集団を

² こうして整理してみると、本書ではあまり言及されない、「サークル村」と関連したもう一人の人物である石牟礼道子に注目してみるものの意義が、評者にはあらためて意識された。石牟礼の、天草の自然と一体化したコミュニケーションのビジョンも議論の射程に収めることができれば、現在の国策による村の破壊をめぐって、「人間」中心の議論を越えたかたちでコミュニケーションのビジョンを捉えられるはしないかということである。

作ることができるか³。1950年代の労働運動の問題とは大手炭鉱と中小炭鉱の間にある二重構造だといわれてきた。著者は二重構造の原因を戦後日本の労組が企業別に始まったことに探っている。しかし、産業別労組が中心の韓国でも、大企業と中小企業の二重構造、非正規職の排除などは変わりなく起きている。労働組織の構造的な問題ばかりではなく、どんな集団でも反復して生じる位階的な関係性の体質変化が求められる。最近の労働形態では多様な非正規労働が生じ、企業外で非正規労組が作られるケースもある。それと同時に、反貧困運動・野宿者運動など、労働と生が緊密に関わる運動も共存している。

このような状況を見ると、著者が企業別労組の制度的な改善だけでなく、労働者間の関係性の質的变化にも焦点を当てていることが持つ意味は重要である。たとえば、サークル運動が労組の支援を受けつつも労組からの独立性を維持した点、炭鉱文学サークルが炭鉱労働と炭鉱居住の経験に基づいた作品を生産し炭鉱独自の文化を育てた点などである。とりわけ、1953年からはじまった「日本のうたごえ」運動は、日本の各地方へと広がり、多様な地域・産業別のサークルとの交流を実現していた。それが日常生活にリズムを与えると同時に闘争に役に立つものになった。私が特に関心を引きかけたのは、うたごえに参加するために集まってきた各人各様のサークル活動家が「汽車」で偶然に出会い、互いの実力の測り合いや情報の交換をした「汽車のなかのコミュニケーション」の様子や、闘争の中で「俺は炭鉱夫だ」と歌って「警官を鼻白ませた」り「もやせ闘魂」は警官が覚えるほど歌ったりしたという出来事である(102)。生、労働、祝祭、交流のうたごえ運動は、「コミュニケーションの快楽」のための「横的連帯」と、その伝染力を感じさせ

た。これは毎日生活と労働をともにした各サークルの日常的な力があつたからこそ作られた「瞬間」であろう。こうした例は現在の労働環境で散在し集まりにくくなっている非正規労働者たちのコミュニケーション作りにも多様な靈感を与えてくれると思われる。また、この例から考えてみると、原発労働の場合は放射線管理の目的で徹底的に分離された労働環境ゆえに、サークルのような活動は難しいことになる。原発労働においてのサークル活動の難しさは、原発労働が閉鎖されるべき労働であることを傍証しているのである。

第二に、いかにすれば東京を一つの地方として把握し、東京を媒介せずに地方と地方の直接的な繋がりを作っていけるのか。日本の二重構造は労働以外の場所でも重層的に存在する問題である。災害後に多くの論者によって語られたのは「東京」／「東北」間の二重構造であった。二重構造に関して、大炭鉱と中小炭鉱、北九州の炭鉱と南九州の農村などの位階化された異質な集団をネットワーク化し、「九州7県及び山口県のサークルを母体として「巨大サークル」を生み出すこと」(138)を試みたのが「サークル村」であった。その運動には、著者が「メンバー同士の中に「異質の要素の同一平面における対立相克」を含んだ「交流」を現実化すべく[取り入れられた一引用者]、ユニークな活動」(155)と評価したネットワーク化の技術があつた。それは「東京」と「地方」の関係を横的に繋ぐ試みにもヒントを与える。その技術とは、1) 総会・懇談会を南九州(熊本)で開催することで「北九州の文化的ヘゲモニーを相対化すると同時に、南九州を架橋する象徴的・実質的な意味」(156)の表示とする。2) 他の労働現場を訪問する。3) 異なるバックグラウンドを持ったメンバーの間の「対立相克」を行い、特に八幡の労働者と周辺の農家の間の関係を「往復書簡」によって可視化する。4) メンバーが所属する労働組合やサークルへの「内政干渉」めいた意見を述べる欄を設ける

³ 李珍景・申知瑛(共編著)『万国のプレカリアートよ、共謀せよ！—日本非正規労働運動家たちとのインタビュー』韓国：クリーン・ビー、2012。この問いは同書第3章のタイトルを援用したものである。

などであった。

そうしたネットワーク化の試みの一つであったが実現されないままに終わった『全国交流誌』を、著者は復元している。これは歴史の事実のレベルを越え、潜在性として残された材料から未来の歴史を復元する作業でもある。『全国交流誌』が、中央メディアが東京中心に構築されることについての批判を込めつつ取った方針は、「地方の問題を「各地方に根をおろした地方編集委員会の手」になる「各地方の独自性」を発揮した編集によって取上げ」（181）、「東京」は日本の中心ではなく「一地方」として位置づけられ「るものとみなすということだった（181）。しかし、これは全ての地域を統一することとは違う。むしろ「中央と地方、地方と地方とが、たがいに交流しあい、刺激しあい、批判しあう場」（181）としての「文化統一戦線」（187）を作ろうとしたのであった。

『サークル村』・大正闘争・退職者連盟での活動後、谷川雁は東京へ移住し、「東京へゆくな」という詩を書いたことによって批判を受ける。上野英信は筑豊の中小労働者の中にさらに深く入り込んでそれを記録する。森崎和江は筑豊に住み続けながら労働の問題を性と植民地の視点から読み直す。そして50年程の月日が流れた。これらの人々の模索が今に伝えてくれる問いは、所謂「誰が地方に住み続けたか」ではなく、「何が地方なのか」ということかもしれない。最近では中心と周辺、「中央」と「地方」、「東京」と「東北」といった非対称的な関係が言われているが、その時の「東北」や「地方」は多様な意味を含む。『わが「おきなわ」』の森崎和江に倣っていえば、棄民化された状況は様々などころにある。沖縄の内部植民地的な状況は解決できないままだし、「東北地方」の内部で旧植民地出身者の子孫たちが朝鮮学校を守りながら暮らしている。東京や大阪のような大都市には非正規労働者、野宿者、「東北」からの移住者、外国人などがいる。野宿者が増えている釜ヶ崎や山谷

には炭鉱労働や原発労働の経験者が多い。森崎が「おきなわを考える会」とともに1967年7月から『わが「おきなわ」』を創刊し、「筑豊の沖縄的状况を考える」（294）という言い方で連帯を主張し、「わが北九州」であり「わが筑豊」であり、「わが未開放部落」であり、かつ「わが職場」であり、そしていったい何と名づけるべきだろうか」（293）と問う時に、一つの地域に固着された「地方」は乗り越えられようとしている。

第三に、「労働」としてさえ認められない労働をする者たちの連帯・交流はいかにして可能なのか。著者は森崎にとって労働運動は本来の問題設定ではなかったとしている。「労働運動への関心は、植民地問題や女性問題に対する関心と違って、森崎自身が長い年月をかけて温めてきたものというよりは、筑豊に移住し『サークル村』や大正闘争に関わるなかで形づくられていったものである」（11）。しかし、別の言い方をすれば、森崎和江にはそもそも労働に対するより幅広い理解があったのではないだろうか。それは女性たちの家事労働やグローバルに移動する売買春事業（セックス・ワーカー）といった、あるいは契約外の労働（偽装請負の問題からサービス・自主的努力とみなされる労働の問題までを含み、男性もさることながら女性に頻繁に見られる）⁴など、狭義の労働として価値化されないことが問題の一角を形成している物事を労働として分類するかという複雑な問題と連なっている。後に詳述するが、その点で、本書が、からゆきさんの労働を流民としての炭鉱労働者の労働と同一線上で扱った森崎和江の特異性を浮き彫りにしたのは、「労

⁴ 最近の韓国では「才能教育」という企業での女性家庭教師の処遇が問題となった。彼女たちは契約上は労働者ではなく、労働者としての資格や得られるべき権利を否認されながら、実質は才能教育の労働者として働いていたのだった（韓国では「特集雇用労働」と呼ばれる契約形態である）。次の拙稿を参照。「私たちの家の前、見えない彼女たち、秘密たち—才能教育の特集雇用労働者、慰安婦ハルモニたち（우리 집 앞, 보이지 않는 그녀들, 비밀들 - 재능교육 특수고용노동자, 위안부 할머니들 -) 『スユ+ノモ Weekly』 <http://suyunomo.net/?p=11115>

働」と「価値」についての挑戦的な再解析ともいえる。森崎和江はからゆきさんの労働を、辺境村の開放的な論理、植民地主義、生む性／生まない性の二項対立を越える思想と繋げることで、「セックス・ワーカー」議論に付いて回る労働論（感情労働や再生産労働などについての議論も含む）の色が濃い価値化をはるかに越えている。「労働」の価値についての再解釈は、本書で記述されるサークル村の他の活動にも見られる。たとえば谷川雁の退職者同盟は、仕事をしないまま、しかも企業の外に位置しながら、企業を相手に退職金を要求し、共同居住を模索するなど、革新的な闘争を展開する。これらはいずれも、生の全てが資本主義的な利潤産出から自由ではない現在の状況にあって、新たな抵抗のあり方と、労働と生の接合点を見せてくれるものである。

3. コミュニケーションの内在的問題

この本で一番興味を引かれるものは、『サークル村』と森崎和江が and で接合された時のインパクトの中にある。そのインパクトから、所謂オルタナティブな集団が抱えている（が表現できない）、コミュニケーションの内在的な問題と権力の再生産の問題が立ち上がってくる。左派組織やオルタナティブな組織についての内在的な問題提起は、そうした集団が作り上げてきた反歴史のダイナミズムを失わないように気をつけながら、いっそう深く問わなければならない。要するに、「沈黙」に接近する回路」（142）は、集団のさらに内奥にある沈黙に接近する回路を作り出すことでもある。その問題意識のもと、ここでは著者自身の解釈を追いながら、そこから少し進んでコミュニケーションの内部的な問題へと繋がる回路を思考してみたい。

問題の一つはコミュニケーションのエネルギーを引き出すときに発生する狂気と閉鎖性に関連するものである。著者は谷川雁が阿蘇中央病院に入院したときの経験から「社会の底辺に生きる人々の暖かい仲間意識に触れて一種の思想的回心」（124）をした

と述べる。その時に彼が発見したのは「土着的エネルギー」の潜在性だったという。谷川は、三池闘争での末端労働者の盛り上がるエネルギーを無視して企業と合意してしまう労組や、その合意を抵抗なく引き受ける労働者の擬似市民主義的な態度、また安保闘争にて共産党が見せた内部対立と少数意見の抑圧などを批判する。そして「エネルギーは組織から独立して存在する」と定め、大正闘争で「坑夫本来の土着的エネルギー」を労働組合を媒介せずに直接動員」（199）しようとした。また、「大正鉱業退職者同盟」を結成し、「筑豊の流れ坑夫」の気質を継承する「血族集団」の参加も得て、退職金獲得」（200）のための闘争を展開し、既存労組とも共産党とも距離を取った。

しかし森崎はこの革新的な運動に批判を加える。森崎は「伝統的な共同体の下で培われた「横の連帯」を高く評価した谷川」と違って、「伝統的な共同体の性格」に批判的であったと著者は語る（237）。森崎は『闘いとエロス』で「石牟礼道子をはじめとして『サークル村』の「多くの会員」は、親類縁者に「狂気」を抱えていた」（238）と指摘し、「狂気を「村落内の相互規約の重荷を一心にうけとめた結果」と解釈し、[大正行動隊は一引用者]「相互開放を集団原理とする共同体を創り出すこと」で乗り越えようとしたが、結果的には事務局員を「激務・激論の果てに」狂気へと追い詰めてしまった」（238）と批判した。森崎の議論をこう整理したうえで、著者は大正行動隊の以上のような特質が「隊員が隊員の妹を強姦し殺害するというショッキングな事件」（240）として顕在化したとしているが、その解釈は強姦殺人事件の核心を捉えた解釈であると思われる。一つのコミュニケーションが維持されるためには昂揚するエネルギーが必要だが、それは内部的には構成員相互間の強制的関係や位階関係を作る暗黙的な規則を生み出す可能性がある。また外部的には他の共同体へと広がっていかない閉鎖性を特異性だと錯覚する場合もある。このぎ

りぎりの境界を考える時に、コミュニンにおける狂気の指摘は大切である。革命がエロスから始まるということを否定しないと同時に、狂気とエネルギーの切れ目を捉える感性は、いかにして集団の中で作られるだろうか。コミュニン内部で行われる多様な教育活動が慎重に議論されねばならないという思いが頭をよぎる。

二つ目は、コミュニンのエネルギーが負の方向へと進み問題が起こったときに、それを語る場が作られにくいということである。権力についての批判は容易い。しかし権力に対抗する集団が持つ問題を提起することは難しい。そのような問題提起が、昂揚する運動の結集力を弱化させたり権力側に利用されたりする危険性があるからである。したがってコミュニン内部の問題はコミュニンの名分のために隠されてしまいやすい。強姦殺人事件が起こった時の谷川と森崎の対応の差異は、ここから生じた。したがって、『サークル村』の活動と森崎和江の間にある間隔からは、コミュニン内部の問題を語る場の重要性が感受されるのである。

三つ目は、オルタナティブな運動の中で伝統的な体質が再生産される問題である。著者によると、森崎和江は「大正行動隊や大正退職者同盟が、激化する反合理化闘争のなかで組織の統一とラディカルな闘争姿勢を維持するために伝統的な共同体の体質を温存した」(242)と批判していた。かつ、「同盟のメンバーの閉じられた権利の確保にとどまり、労働者の横断的な連帯にむすびついていない」(282)と指摘した。退職した労働者の空席を埋めたのは下請け労働者で、その人たちはより冷遇された状態に置かれたし、「同盟員個々人が生活費を稼ぐために組夫となったり下請け工となったり」(288)したのだが、退職者同盟と幅広い未組織中小炭鉱労働者との連帯は模索できなかった。結局、「労働者の組織から見放された」これらの人々は、「親分子分の原理」によって組織され、「親分子分集団のまま新設産業あるいは巨大産業の下請

け部門へ吸収」(290)された。著者はこの重層的な二重構想の再生産について次のように記している。「農村とは見違えるほど高度化された産業地帯にムラが再生された。以下は「没落的開放」の無味乾燥な結果報告である」(245)。

四つ目は、コミュニン内部で起こる感情的「占有」の問題である。離職炭鉱労働者が親分子分で組織されたことについて述べる箇所、著者は森崎和江を介して次のような興味深い解釈を提示している。親分子分として集まった労働者は、自分たちを呼んでくれた人々に対する「義理人情の感覚」(244)のために「不満を言うのが難しい」状態に陥るとともに、このような小集団の間には敵対関係が広がるというものである。この感情の動きが示すように、コミュニンの内部では「所有」ではなく「占有」が問題化される。その集団に早くから参加していたり、集団内の誰かと親しかったり、この集団を良く知っていたりといった占有感覚が、コミュニン内部の位階を形成する。

こうした感覚は、女性のコミュニンについて語られる際に、より繊細に表現されている。森崎和江は「炭夫会」への批判において、女性集団の中で再生産される家父長制と性役割の固着を批判する。著者はこのような森崎の思考には「ウーマン・リブを先取りしている」(251)部分があり、「森崎の女性論には集団への問いが交錯している」(253)と述べる。女性論と集団論が重なりあう地点の指摘は大切で、それは「被害者の自由」という言葉と繋がる。『無名通信』に登場する女性たちは自分が何も持っていないという被害者意識を深く持っている。そして何も持っていない状態で、何も持っていないという感情を占有することによって、何もしなくてもよい自由を獲得する。本書では深く言及されていないが、森崎の『非所有の所有』という著作が扱っているテーマはまさにこれで、そこでは森崎和江の女性論かつ集団論が「被害者」としての内的呪縛から自らを解き放つこと」(258)

へと辿りついている。

ここまで、著者が強調している森崎和江の「同化形共同体」への拒否というスタンスに注目してコミュニケーションの内在的な問題を引き出してみたが、この問いはコミュニケーションの成功と失敗についてのイメージを変える。たとえば、三池闘争、大正闘争、大正鉱業退職者同盟が一番活発に行われている時期に、なぜ上野英信は労働者の連帯への希望が完全に消えた『追われゆく坑夫たち』(1960)を書いたのかという著者の問題提起は、炭鉱労働者たちの中に存在した多様な時間性を浮き彫りにしてくれる。上野によると中小炭鉱の労働者は労組に入ることも労組を作ることも出来なかったし、労組もそれを顧みなかった。中小炭鉱は単純に規模が小さい炭鉱なのではなく、大炭鉱から捨てられた閉鉱で、病んでいたり年を取っていたり異族だったりという人々が働く、無気力の空間であったという。三池闘争などの最中にあっても中小炭鉱は「別世界」のようだった。三池闘争・大正闘争・大正鉱業退職者闘争の時期は、ある種の成功の瞬間のように見えるが、中小炭坑の問題は欠落し、同時に炭鉱の時間は断たれていた。反面、それらの運動が終わっていく過程は失敗のように見えるが、その中で上述したコミュニケーション内部のさまざまな問題が浮き彫りになり、それらの問題がもう一つのコミュニケーションへの潜在性として残った。成功と思える瞬間に何が欠落し失敗と思える瞬間にどのような潜在性があらわれるのかを現在の問いとして反復させる力が、本書が森崎和江と上野英信を描き出す局面において生まれている。この力が、出現と消失を繰り返す現在の多様なコミュニケーションに、その内部の問題を語り続ける言葉を与えてくれると期待できるのである。

4. 異族との接触思想と「アジアの女たち」

本書で一番まぶしく映るのは、やはり第3部である。第3部「森崎和江における「交流」の思想」

は、同化型共同体が持つ問題を批判しながら、女性論の視点を引き入れて炭鉱での労働運動を再検討する1・2章、筑豊的な状況と沖縄の状況との連繋による交流を模索した動きを扱う3章、森崎によるからゆきさんの性労働と炭鉱の地下労働との連繋を、さらに森崎の朝鮮経験と繋げて労働・性・植民地を貫く思想的視座を提起している4章からなる。これらの議論は全て、第3部のタイトルが示すように森崎の交流論—異族との接触思想—として構成されている。ここでの異族とは民族間の関係に留まるものではなく、男／女、生める性／生めない性、生／死、大炭鉱労働者／中小炭鉱労働者といった多様な広がりを含み、その根底では労働・性・植民地が拮抗する。アジアにおける異族の接触とは、歴史的には多分に強制的に後押しされたものであるが、多民族集団であった倭寇の経験における接触、植民地化過程での強制的な接触、異族たちが労働者として集まっていた炭鉱での接触、からゆきさんの海外性労働における接触などの諸相を持った。そして、資本・植民地・国家によって（半）強制的に行われたこの異族間の接触から、その強制的な権力に対する批判を弱めることなく、いかに人々の自律的な行為性を生み出すのかということが問われるのである。

森崎は部落共同体から離脱し流民化した炭鉱労働者と「おなご仕事」を担うために海を渡ったからゆきさん」を、同じ越境する底辺労働者とみなす。こうして、炭鉱底辺労働者にもからゆきさんにも「分断された「異族」間の「媒介者」の姿を認めた」(315)のだと著者は指摘している。しかし、これらの人々に可能性として潜在していた接触は成就せずに終わる。炭鉱では、「経営者の巧みな統治技術と民衆自身の伝統に根ざす共同体意識は異族同士の接近を阻んだ」(234)。所謂「納屋頭」という中間管理者の統治技術はまさにそうである。からゆきさんは、「日本から「食を求めて」海外に渡った出稼ぎ労働者であると同時に、日本のアジ

アの侵略の尖兵でもあった」(324)のために、植民地の人々との交流は出来なかった。このような壁の底には、「生む」⁵という事態を受動態で把握したり、天皇の誕生にまつわる「生む」行為を隠すことで異族や生死の根源的な矛盾との関わりを隠蔽し他者化する、日本民衆の同化主義的な感性があったことも、著者は見逃してはいない。

したがって日本民衆は異族との自立的な関係を構築することはできなかった。ただ食べるためにやってきた「無国籍な状態のからゆきさんたちが、日本の女としてみられ」(324)てしまう。また、朝鮮人の男性は性欲のためだけではなく復讐心のためにからゆきさんを買って苦しめ、それがからゆきさんの体に消すことの出来ないトラウマを残す。「クニの観念」がなかった彼女らを「日本人」として異族と出会わしめたのは、「日本による侵略と戦争」(327)であったという批判である。著者は、森崎にとってからゆきさんの経験は自分の幼少の頃の体験と重なったと述べている。朝鮮で植民者2世として生まれた森崎は「被支配者であった朝鮮人と出会いながら、ネーションの境界に阻まれて出会えなかった」(316)。しかし森崎は「挫折に終わった自身の体験に向き合い、この体験のなかから「異族」間の出会いの思想を生み出そうとした」(316)と著者は評価する。

⁵ 著者は、森崎が朝鮮語では「「がちょうが卵を生みました」と、「仔豚が七匹生まれました」のいずれの文の述語にも「났읍니다」(ナッスムニダ)という同一の動詞が用いられていると述べ、そのことに深い感動を示している」(223)という例を提出している。しかし、朝鮮語で「낳다/났읍니다」(生む/生みます)という動詞が、「生まれる」の場合にも使われるわけではない。「生まれた」の場合、「낳다(生む)」という動詞ではなく、「태어나다(生まれる)」という別の動詞が使われる。しかし、その場合、日本語のように「生む/生まれる=能動態/受動態」の関係ではなく、どちらの動詞も能動態に属するという点では、森崎和江の言葉についての感覚は正しかったと思われる。また、日本人の友人の解釈を借りると、もし森崎が当の朝鮮語を耳で聞いて覚えていたのだとしたら、生みましたという意味의 낳았읍니다と生まれましたという意味의 나왔읍니다(出てきました)という、発音のよく似た二つの言葉を同一のものとして聞いた可能性もある。その場合も、やはりどちらの動詞も能動態に属するという点は同じである。

地下炭鉱労働とからゆきさんの性労働が持つ「浮遊性」、あるいはもう一つの世界への感受性を同一線上で把握し、それを自分の朝鮮での経験と交錯させながら「異族との出会い」の思想へと飛翔させる森崎和江と、そう思考した人としての森崎を浮き彫りにした著者に関心しながら、私は本書を読んだ。同時に、もしこの思想を朝鮮の脈絡へと繋げるとどのようなものになるのかを、本書の論理に基づいて考えてみたいと思った。もちろん、労働運動とコミュニケーションについての内在的考察や女性論としてだけ考えても、森崎和江の思想と、それについての著者の解釈は輝いている。しかし、そうした森崎の思想が可能であったのは、やはり植民者2世としての植民地での経験があったからだと思われる。日本内部にあるナショナリズムや継続する植民地主義、さらに家父長制についての根本的な批判になった森崎和江の思想は、朝鮮へと伝えられるとき、その地の思想にどのような刺激を与えることが出来るだろう。韓国の民族主義の固い壁と、苦しい感情記憶としてうずくまっている植民地権力への抵抗感を避けることなく、そこに真正面からぶつかりながら、それと同時に彼女を植民者2世の良心的女性知識人というレッテルに留めることなく読むことが、いかにして可能だろうか。

森崎和江の文章を翻訳するという経験において感じられた私の中の揺れは、ここに起因すると思われる。たとえば、二つ前の段落で引用した森崎の言葉である「日本の侵略と戦争」や、著者の言葉である「ネーションの境界」という表現が指しているのものであるものに関しては、韓国ならば「植民地」という言葉が連想され、また、そう表現することを要求されると思われる。これは、どうしようもなく横たわる非対称的な経験と位置関係に由来するものであり、継続する植民地問題の反映でもある。このようにすぐさま「植民地」という言葉を連想する感性が、他の植民地との関係性を

自ら考えがたくしてしまう韓国の「排他的ナショナリズム」とどこかで繋がる危険性を常に含んでいるとしても、である。だからこそ、森崎の次の言葉は意味深長である。「17 歳まで、朝鮮人の幼児から老人にいたるまでのまなざしに集団姦を感じなかったことは一度もない」(220)。森崎のこのような感性は、金嬉老事件について書いた「二つのことば、二つのところ」(『ことばの宇宙』1968年5月)を読む時にも感じられる。この感性から導かれるところでは、からゆきさんの体に刻まれた暴力とは、日本がアジアに加えた暴力が、朝鮮人男性の苦労と独立への願いが込められた辛い悲鳴になって、からゆきさんの体へと回帰したものだともいえるだろう。さらに想像を進めると、朝鮮人男性がからゆきさんを苦しめることは、炭鉱労働者の「土着的なエネルギー」が持っていた狂気をどこかで思わせもする。しかし、朝鮮人男性労働者がからゆきさんを買うために、数名が集まって自分たちの家や財産を処分して金を作り、そうまでして日本人から受けた暴力や国を失った屈辱の復讐へと向かったという、より悲惨な状況が『からゆきさん』(1976)には明確に書かれていたことを忘れてはいけない。森崎の言葉は、朝鮮の抵抗的な民族主義が持つ男性中心主義への批判としてありうると同時に、なぜ朝鮮の抵抗的な民族主義がそのような男性性や暴力性を帯びることになったのかということへの批判的検討—植民地主義が持つ暴力についての批判的な検討—を除きはしない。

ところで、からゆきさんをめぐる解釈が朝鮮あるいは他のアジアに「接触」の相手を見つけようとすれば、それはどうやら現在に至る歴史の中の、アジアの女たちのようである。それらの女性たちの関係性に遥かに広がる差異を深く論じることから、「接触」は始まるのではないだろうか。これは比較ではない。彼女たちの苦しくも多様なアジア各地での生活経験をいかに語ることができるのか

という問いを、からゆきさんについての森崎の意味づけが投げかけているような気もする。生と呼ぶにはあまりに残酷で、語りえないほど辛い、やはり生と呼ぶほかない、歴史の中のアジア女性たちの生。そして、彼女たちの生を「アジア女性たちの生」と呼ぶやいなや、その中に絶え間なく広がる差異をもって反撃してくる、接合と抵抗のアジア女性たちの関係性一。

このような関係性を考えると、本書が言及する森崎和江における植民地主義の問題は、労働運動や性に関連させるだけではなく、もう少し細かく論じる必要もあるのではないか。森崎は朝鮮での植民者としての経験を語る時に、幼少時の自分の世話をしてくれた「オモニ」(お母さんの意味)と「ネエヤ」を想起している。その記憶は確かではなく、懐かしさと罪悪感が混ざった形で浮かんでくるが、それは森崎が朝鮮語に言及するときにも同じであることの意味を考えなければならない。森崎和江が朝鮮で経験し戦後日本の同化主義と繋げて批判した植民地主義と、オモニやネエヤ、あるいはあちこちに売られたり強制的に連れて行かれたりした者たちが経験した植民地主義は、随分と差異があるに違いない。差異のありようは戦後にも引き継がれた。炭鉱には植民地時代に徴用などで連れてこられた人々が故郷に戻ることが出来ないまま残っており、たくさんの朝鮮人・中国人がいた。茶園さんが「アリラン部落」について書いた論文⁶では、炭鉱で働くことが出来なくなってしまった様々な人々が住んだ場所として「アリラン部落」を扱っている。朝鮮人などは主に大企業の炭坑労働の外、あるいは小さい炭鉱で働いていたのかとも考えた。つまり、日本の二重構

⁶ 茶園梨加「北部九州におけるサークル運動と朝鮮人—上野英信「あひるのうた」が提起する問題」『近代文学論集』35号、2009年11月、106頁。ここに住んでいたのは朝鮮人だけではなく。そこには炭鉱で働けなくなった人々、炭鉱で夫をなくした女性、体を壊したり年を取ったりした人々が集まっていた。つまり、「炭鉱の周辺に位置し、炭鉱で働けなくなった朝鮮人と日本人が住んでいる場所であった」。

造は、植民地主義が残したものと深くつながっている。さらにいえば、サークル運動の盛り上がりは朝鮮戦争によって日本の高度成長があったからこそ可能であったことも、もし、アジアへの連帯を求めるなら、より詳しく論じる必要があるだろう。つまり、これらの問いは、1950年代に隆盛したサークル運動の非常に優れた活動と思想を、40年代半ばから50年代半ばまでアジア各地で起こっていた内戦・占領などの悲惨な状況と繋ぐ回路を模索することでもあるだろう。

このように、本書のテーマと思想を、アジア（の女性）へと繋げようと試みるほど、次第に多様なずれが見えてきて、様々な問いが溢れてくる。だが、森崎和江にとってのアジア、あるいは「朝鮮」なるものは、地域ではなく、思想的イメージだったかもしれない。著者が触れているような、上野が「さようなら三池」（『どきゅめんと・筑豊』。初出は『新週刊』1961年10月19日号）で語ったふるさと、つまり閉鉱後は南米への出稼ぎ労働者になった中小炭鉱労働者たちが、自身は中小炭鉱の労働者だからという理由で参加することさえ出来なかった三池闘争にさまざまな激励・応援・挨拶の言葉を寄せるときに浮かんでくる「幻想としてのふるさと」かもしれない。そのような点で、森崎和江が提起した異族間の接触の思想は、これから展開されていくべき未完の企画であろう。森崎和江が「私は「私」のぶれの事実をみとめつづける勇気を持ちたいのです」（331）ということと、著者が「「ふるさと幻想」の組み替えを唱える」（334）と述べたこととは、この未完の企画の方向性を示している。

5. 『第三の性』と、反撃を含む「and」

1950年代のサークル活動及び谷川、森崎、上野から引き出すことができるのは、異質なものを接触させることによって生まれたコミュニケーション的表現の資源である。本書は言葉の「表現」について独

立した章を設けてはいないが、『無名通信』の「井戸端会議の自己診断」という会議録で試みられた対話・聞き書き・手紙やノートの交換といった女たちの表現が、『第三の性』（1965）で本格的に使われていることを、実証的な資料を用いて明らかにしている。『無名通信』で試みられながらも女性メンバーの強姦殺人事件のために持続することが出来なかったこの対話形式がフィクションの形を借りて再現され、「男女間の出会いの思想」が「女性同士の対話を通じて展開」（264）された。著者は『第三の性』について、「男性の性を断罪する書物ではなく、性愛を通じた男女間の出会いの可能性を語る書物としたということ、そこに森崎の女性論の核心がある」（264）と評価する。このように、そこで使われている対話とは、異族を突き合わせながら繋ぐやり方であった。たとえば、元気な紗枝と病中の律子、性愛に満ちた紗枝と恋愛経験のない律子、生める紗枝と生めない律子など、さまざまな対立が繋がれるうちに、紗枝と律子という固有名は集団の名のようにも感じられる。また、紗枝と律子の言葉が重なっていく様が、ある種の聞き書き作業を思わせもする。著者はその対話が、「真剣ななかにも生活感を滲ませ、井戸端会議的なとりとめのなさを漂わせている」（272）と指摘する。

ところで、異族同士の遭遇の記述において、対話形式が生成される条件なるものはあるのだろうか。本書の書評会の席で著者は、森崎の聞き書きが、まさに炭鉱での女性たちからの聞き取りに起源を持つことを書いた森崎の文章があることを教えてくれた。「聞き書きの記憶の中を流れるもの」⁷である。だが、このテキストからは単純に聞き書きの始まりに関してだけではなく、彼女たちの表現法についてのヒントを受け取ることが出来た。聞き書きは何かを語ってくれる人がいなければならない。

⁷森崎和江、「聞き書きの記憶の中を流れるもの」『思想の科学』159号、1992年12月号。以降、この文献からの引用は（「聞き書き」／頁）として表示。

しかし、「聞き書きの記憶の中を流れるもの」では、語ることさえできない人や、人が語らないでいる瞬間のことも書かれている。同じ話を繰り返していた元炭鉱夫だった女性が「ありがとう、これでいつ死んでも思い残すことはなか。腹の中みんな話したのもあんたのおかげ」（「聞き書き」／15）と告げたり、涙で語ったりする人々が出てくる。また、森崎はこの文章に『語り』がふっと火を消した瞬間を私はよく覚えている」（「聞き書き」／14）と書き留めている。ここで定義されている「語る」という行為は、「個体の生命の脈絡を、それを生かそうとする超越的な生命体を共有する他者へ、かずかずの障害がいどみかかってきた個体史を怒りや笑いや嘆きをこめて伝達する」（「聞き書き」／15）ことだとされている。まさにこのような文字によっては語れないことまで含んだため息・吹き・涙などを体に抱えながら、聞き書きは始まる。そのような意味で、聞き書きは固有名を主語として、あるいは「私」を主語として書かれているが、それらは複数の主体を含んだ主語である。またそこには森崎の「エロス」論も反映されている。著者は、森崎が「愛は特定の個人と異性集団全体に対する愛の二重性を持つ」（269）としている部分を捉え、森崎のエロスが「集団的エロス」であることを浮き彫りにする。「性の解放と平等とは個体の心身の中に、それぞれのセクシュアリティがかかえている千年と対峙する個々の女、個々の男を目覚めさせる以外にない」（264）のである。多分に「異性愛」を想定しているようにも感じられる件だが、そこではエロスが個人的かつ閉鎖的なエロスに留まることなく、集団的な歴史の全体と対面する表現として開かれている。つまり、聞き書きは大衆を再現する記述法なのではなく、異質な二つの集団の中で変身していく身体的な行為である。

上野英信の場合はどうだっただろう。著者は、彼の書く文章が「炭鉱を舞台とする創作から炭鉱をとりまく同時代性の動きをリアルに扱うルポル

タージュに転換」（206）した理由を、上野の次のような言葉を引用して説明している。上野が「虚構の世界に心の憂いを託すこと」を止めた理由は、「筑豊の地底で幾百万人の生き血を吸って成長した日本資本主義は、私ごときの貧困な想像力をもってしては到底思いもえがけないほどの恐るべき棄民地獄を、もののみごとに白日の下にえがきあげてしまったから」（206）だという。つまり著者によると、上野は、世界があまりにも残酷になり、現実が個人の想像を超え異質なものとなった時に、その世界の構成要素である労働者たちの話を聞いてルポを書き始めたというのである。谷川雁にとっては、人々を魅了する対話はネットワークを作るのに役立つものであっただろう。それぞれの場面で著者は、これら三人の強い個性と役割を強調しているが、各自の固有名は、三人と対話を続けてくれた有名無名の集団との関係を同時に想起させる。谷川雁という名前は「大正闘争・退職者同盟」の人々から離れない名前になり、上野英信は「中小炭鉱に住み続けた底辺炭鉱夫から離れない名前になり、森崎和江は『無名通信』とからゆきさんから離れない名前になる。異質な集団・世界とのぶつかり合い・関係性から、対話によるネットワーク作りが、ルポが、聞き書きが始まった。

まさに本書もこのような数多くの対話と出会いから作られた。著者はそのすべての対話を本に収めることはできなかったと述べる（397）。たとえば、炭鉱生活のユニークな面や、サークル活動が終わってからの個人史などがそうである。聞く行為は倫理性を要求するし、要求されもする。おそらくは、取材した内容のうちには、秘密に属する事柄のために、またはアカデミズムの枠では表現できないとの判断によって、盛り込まれなかった物語もあったのではないか。そうした物語については、本書以降に提出されるであろう著者の研究で、別のスタイルを纏ったそれらと出会えることを密かに夢想している。

個人的には、この本を読みながら、森崎和江を翻訳するときに感じた戸惑いを少し解消できたような気がする。森崎の文には、朝鮮語の風景が感じられる日本語や、見聞きしたことのない朝鮮語が出てくる。森崎自身の文がすでに言語・表象・記憶などの多層的な翻訳を経たものであり、それを翻訳しようにも日本語から朝鮮語へと移しきれない部分が多くて、一対一の翻訳はできないずれが感じられる。さらに困るのは、どうしても主語を確定することが出来ない件がある。主語を確定すると述語が揺れ、述語を能動態か受動態のいずれかに確定すると、今度は主語が揺れてしまう。本書を読むことは、そのようなズレが、森崎和江の植民地での経験だけではなく、数多くの対話の中で文を書いているために生じるものであったことをあらためて感じる大事な経験であった。集団と接することによる揺らぎの中で、異族たちの対話法は、すべての物事を理性の光の下に裸で晒すことをしない。むしろどんな「語り」の瞬間にも、文字になれない溜め息、呟き、揺れ、涙と笑いが残る。聞き書き・ルポ・ネットワーク作りに漂う秘密のように。

私にとってサークル運動が魅力的であった理由は、コミュンというあり方の内部に現在進行形で取り付く問題を表現し解決していく言葉を、その中から得ることができると思ったからだ。もちろん、本書は1950年代サークル運動の全体像を誠実に整理していると同時に、それが日本の戦後運動史でどのように位置づけられているかについての豊かな考察も含んでいる。それゆえ入門書としても歴史書としても思想書としても読める。しかし私は、本書の学術的な安定性という長所から出発しつつも、1970年代に止まってしまったサークル運動や、森崎和江の異族との出会いとコミュンへの模索を、現在におけるアジアのコミュン論として読み、本書の運命がより広がっていくことを想像してみたかった。それを可能にさせ

るくらい、本書は、森崎和江の議論を辿ってサークル活動や『サークル村』の運動を読み直すことでコミュンの内密な問題を浮き彫りにする、潜在的なコミュン論としても読める。私は本書を読みながら、コミュンの内在的な問題と表現を、植民地化に対する敏感さを含み、異族との接触思想を通じて考え直すことが出来た。

森崎和江さんと長い対話を交わす機会は昨年に与えられた。一緒に食べて歩いて寝ながら一日を過ごし、森崎さんが持っている強度の高い肯定のエネルギーに感動した。何度も「嬉しい！」と声に出す森崎さんの口癖を学んでしまったほどであった。このとき私は、ある友人からの頼まれごとで、『からゆきさん』の最後にあらわれる「そのときはわたしは、娼婦のさがをものびのびと育てよう」という一節での「娼婦」の意味が何なのかを森崎さんに尋ねた。たぶん、異族へと開かれた開放的な体質を育てていくという意味だろうと思いながら。しかし、返ってきた答えは予想外であった。「だから、普通の女のことよ」。森崎さんがいつも口にする「嬉しい」と言う感情と、「普通の女」と「娼婦」の間に区別を置かない感性とを、本書を読む間にも感じる事が出来た。だが、それだけではない。むしろ、「普通の女」と口にしたとたん、その範疇に収まることに反発し跳ね上がる「アジアの女性たち」の悲鳴、その多彩な反撃を含む接触のエネルギーに、異族との接触思想がある。そのエネルギーこそ、著者が森崎和江に依拠しながら『サークル村』を読み直す過程で異質なものを結んだ、「反撃を含むand」のエネルギーかもしれない⁸。

(しん じよん・一橋大学大学院博士後期課程)

⁸ 本稿の日本語の校正を引き受けていただき、また幾つかの語彙や表現の選択に関して相談にのってくださった和田圭弘さんに心より感謝する。しかし最終的な文責は筆者が負うものである。